

角館の柗祭り

観光客のための「やまぶつけ」

平成30年9月7, 8, 9日

9月8日

No.	時間	場所	曳山名
1	18:30頃	角館郵便局付近	西部一大塚
2	19:00頃	角館観光タクシー付近	横町一桜美町
3	19:00頃	土間人付近	川原町一中央通り
4	19:00頃	小絆纏付近	駅通り一七日町
5	21:30頃	大横丁十字路付近	菅沢一西勝楽町
6	22:00頃	安藤醸造付近	北部一岩瀬
7	22:00頃	白百合美容院付近	駅前一下岩瀬町

9月9日

No.	時間	場所	曳山名
1	18:30頃	立町十字路付近	菅沢一本町通り

◆ 祭礼 神明社

七日 午前10時 例大祭当日祭
午後八時 例大祭宵祭

八日 午前八時から神輿渡御

成就院薬師堂

八日 午後三時 祭典開白法要
九日 午前七時十分から 御輿巡行

◆ 山車のみどころ

七日 午後四時、神明社参拝、十七台の山車が一斉に神明社へ

八日 午前10時、佐竹さんへ、各山車が武家屋敷通りを佐竹さんへお見せにまいります。午後六時三〇分、丁内七ヶ所、観光やまぶつけ(別表)

九日 午前10時、薬師さん参拝の山車、あるいは町内を見せる山車など。夜八時頃、夕食後、各山車は偵察員を出し作戦を練りながら山車ぶつけの相手はどこか、一番スリルに富んだ時間となります。十日未明まで続きます。

◆ お祭りの解説

山車(曳山、やま) 祭の「余興」として出されたものですが、今では祭の主役のようになっています。古くは薬師さんの祭に合わせたものとされています。

上りやま 目的の地(神明社、佐竹さん、薬師堂)へ向かうときの山車をいいます。囃子は重々しく、ゆったりとしたセーヤードンという囃子です。

下りやま(道中) 目的の地で参拝、見せたあとの帰りの山車をいいます。囃子は、ベレレ、ベレレと軽いテンポで、道中ともいいます。

交渉(こうしょう) 山車が丁内に入るとき、山車と山車が出合ったときに交渉といって黄色いタスキをかけた山車の交渉員が挨拶と話し合いをします。山車では重要な役目で交渉が弱かったり、負けますと道をゆずることになります。

張番(はりばん) 各丁内に設置され、神明社と薬師の御輿を迎えて丁内の安全、加護をお祈りするともに、山車の出入りの許可丁内でのトラブルの交渉にもあたります。各丁内とも年番組織で運営をしています。昔は自町内の山車の動きもここから指揮しました。

ユネスコ無形文化遺産登録
国重要無形民俗文化財
「角館祭りのやま行事」

ミニ曳山	大置山				場所
角館こども園 梅王丸	安藤家 赤穂浪士討ち入りの場	角館駅前 歌舞伎十八番の内 矢の根	神明社 角館鎮守	勝楽山成就院 薬師堂	立町 大坂冬の陣 真田丸
梅王丸	大石内蔵助 堀部安兵衛 武林唯七 清水一学 小林平八郎	曾我五郎時致 曾我十郎祐成 馬士畑右衛門	酒呑童子 門番の鬼 都の女官 坂田公時 源頼光	源義経 静御前 武蔵坊弁慶 下男の喜三太 土佐坊昌俊	真田左衛門佐幸村 木村重成 真田大助 前田兵士 徳川家康
萬谷会	広目屋	角館きがた	広目屋	広目屋	角館きがた
<p>関ヶ原の合戦後、徳川家康は征夷大将軍となり江戸幕府を開いた。後には息子秀忠に政権を譲り豊臣家に戻すことはなく、天下を統一したいと老えていた。しかし豊臣家も財力や武力、そして大坂城を保有しているため、徳川家にとつては目障りな存在であった。家康は、そんな豊臣家を挑発し方広寺鐘銘事件を戦さの引き金とした。</p> <p>東の徳川軍は二十万の大軍。西の豊臣軍は諸国の浪人を集め十万。その中には、高野山の九度山に配流されていた真田信繁改め真田左衛門佐幸村も参戦した。</p> <p>堀に囲まれている大坂城だが、幸村は南の平野口が、手薄と判断し出城「真田丸」を築城した。</p> <p>慶長十九年十一月、木津川口・今福・鳴野の戦いにて大坂冬の陣が始まる。十二月四日には真田軍の挑発に乗った徳川勢前田隊・松平隊が真田丸へ突撃を開始する。幸村は、父、昌幸に学んだ上田合戦の経験を活かし、敵を誘い込んでから叩く兵法にて両隊に圧勝するのであった。</p> <p>源頼朝と弟の義経が対立した文治元年(一一八五年)頼朝は京にいる義経を誅するべく、その役目を土佐坊昌俊に命じた。</p> <p>十月、土佐坊は頼朝の名代で熊野詣という名目で京に入った。土佐坊は起請文を義経に差し出し安心させたその夜に六十余騎で堀川館への襲撃を決行。義経方の家人達は出払って手薄の中、静御前がいち早く気付き義経を起し戦支度を行う。下男の喜三太は得意の弓を駆使して、ただ一人で主を守り味方が到着するまで奮戦した。</p> <p>やがて武蔵坊弁慶や多くの家来や味方が駆けつけると、土佐坊方は総崩れになり、散り散りに敗走したのだった。</p> <p>平安の世、都では多くの美女がさらわれるという事件が相次いでいた。陰陽博士の占いによると都の西北にある大江山に住む鬼王・酒呑童子という鬼の仕業だといふ。帝は源頼光を呼びよせ鬼討伐を命じた。頼光と四天王の渡辺綱、坂田公時、卜部季武、碓井貞光そして藤原保昌の一行は、住吉明神、石清水八幡、熊野権現に加護を祈願し、山伏に姿を変えて都を出発した。大江山に着き藤原保昌の一行は、住吉明神、石清水八幡、熊野権現に加護を祈願し、山伏に姿を変えた。彼らは住吉、八幡、熊野の神々の化身であった。さらに進むと川で着物を洗っている娘に出会った。彼女も都からさらわれた女官で、道を教わった頼光の一行は鬼のすみかにとどろき、門番をすする鬼に案内を乞うと稲妻がしかりにきらめく中、酒呑童子が現れた。頼光は諸国修行の山伏であるとして、宿を求めた。童子の客となった頼光は酒宴の帝で山伏持参の酒を鬼たちに振るまわった。酒に酔った鬼たちは舞を舞い、頼光もそれに応えるように舞を披露した。やがて鬼たちが殺入したところで頼光たちはさげすみに隠れていた。頼光は舞を舞い、頼光もそれに応えるように舞を披露した。鬼どももそこそこ退治し、囚われた娘たちを伴って都に凱旋した。こうして再び国が治ったのである。</p> <p>ここは曾我五郎時致の故郷である相模国 古井。父の仇討ちに備え、大きな矢の根を砥石で研いでいる。大薩摩丈太夫が年始の挨拶に来て、宝船の絵を置いていった。やがて五郎は、眠くなり、めでたい初夢でも見よう、と、宝船の絵を枕に大の字になって寝る。ところが、夢枕にあらわれたのは兄の曾我十郎祐成。夢の中で、敵の工藤経経の館に捕えられているのを助けようというのである。驚いて目覚めた五郎。ちよどそこへやって来たのは初荷大根を馬に背負わせた馬士畑右衛門。五郎は馬をひたくり、大根を鞭にして駆け出し、兄救出へと向かう。</p> <p>「矢の根」は、力感あふれる荒事で歌舞伎十八番の代表作である。富士山や、七福神、宝船など江戸の初春に演じられる歌舞伎演目である。</p> <p>元禄十四年三月十四日、播磨国赤穂藩の城主・浅野内匠頭長矩が突然、高家筆頭の吉良上野介義央に斬りかかった。浅野はその日のうちに切腹を申しつけられ、赤穂藩浅野家五万三三四石は改易となった。一方、吉良には何のりかめもなしという。それは武家法則の伝統である喧嘩両成敗の原則に外れた一方的な処置であることは明らかであった。</p> <p>赤穂藩では筆頭家老の大石内蔵助良雄が藩士を集め議論を重ねた上に出した結論は「士として義をつらぬく」ことであった。赤穂藩を四月十九日に明け渡し浪人となった同志一同は、長い忍従の日々を経て元禄十五年十二月十四日、ついに吉良邸討入りの日が決まった。奇しくも十四日は七君の命日であった。</p> <p>十五日未明、吉良邸前に参集した四十七人の同志は、大石の合図で一斉に屋敷内に乱入した。堀部安兵衛、武林唯七らの奮戦はめざましく、吉良家用人の清水一学や小林平八郎も激しく応戦するもついに力尽きた。上野介の行方がなく、判らなかつたが入念に探して炭小屋に隠れているのを発見、ついに首級を挙げることとなった。勝どきの音頭に同志たちはただただ号泣したのであった。</p> <p>歌舞伎菅原伝授手習鑑の登場人物。 梅王丸は白太夫の三つ子の長男で菅丞相(学問の神様菅原道真公)の舎人(どねり)三兄弟の中でも一番腕っぶしが強い。</p>					

大置山人形外題解説

おとおき やまにんぎょう げだいかいせつ

曳山人形外題解説

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	曳山名	人形場面	人形作者	囃子・踊り	人形場面	解説	責任者	
大塚	岩瀬	下岩瀬町	西部	桜美町	菅沢	駅前	駅通り	本町通り	西勝楽町	七日町	中央通り	上新町	横町	旭谷山根	北部	川原町	曳山名	川中島の戦い	角館お山ばやし	角館お山ばやし	川中島の戦いは、北信濃の支配権をめぐる甲斐の武田信玄と村上義清が抗争をくり広げ、敗れた村上が、越後の上杉謙信に助けを求めたことがきっかけで始まった。12年余り第5次合戦まで続いた上杉謙信と武田信玄の戦いのなかで、第4次合戦「八幡原の戦い」(1561年)は、最も激しい戦いとなり両軍の損害は武田軍4000、上杉軍3000にもおよんだ。武田軍の名軍師「山本勘助」が最期を迎えた勇ましい場面。	高野豊彦 村岡康成 渡部大 辻瞬也		
歌舞伎十八番 矢の根 曾我五郎	桶狭間の戦い 織田信長 今川義元	羅生門 渡辺綱 羅生門の鬼	法界坊 忠臣甚平 法界坊・野分姫の霊	歌舞伎十八番 蛇柳 蛇柳の精魂 金剛丸照忠	碓知盛 平知盛	寿 曾我対面 曾我五郎 朝比奈三郎	祇園祭礼信仰記 金閣寺 佐藤虎之助正清 松永大膳	山陰の麒麟児一騎打ち 月山富田城の戦い 山中鹿介幸盛 榎木狼介勝盛	絵本太功記 十段目 武智十兵衛光秀 真柴筑前守久吉	歌舞伎十八番 不動 不動明王	義経千本桜 鳥居前 佐藤忠信 武蔵坊弁慶	歌舞伎十八番の内 勸進帳 武蔵坊弁慶 富樫左衛門	源平盛衰記 篠原の合戦の場 齊藤列当実盛 手塚太郎光盛	依藤太伝 夢幻将門 坂東平定 依藤太秀郷 平将門	綴引 悪七兵衛景清 三保谷四郎国俊	川原町	人形場面	人形作者	囃子・踊り	人形場面	解説	責任者		
大塚若者 郷土芸能 角館飾山囃子 保存会	広目屋 祭喜会	如月会 藤原組	文 秋 月 会	若 者 会 徳月会	菅沢丁内 若者会	萬谷流 角館町 飾山囃子 手踊り会	広目屋 愁明会	神代芸能保存 嬉遊会	文 秋 月 会	小 松 くらび座	広目屋 奏雅扇舞会	萬谷流 おやまばやし 清友会	横町若者 角館山本組	広目屋 徳月会	若 者 会 昇風会	角館お山ばやし	人形作者	囃子・踊り	人形場面	解説	責任者			
曾我兄弟の弟五郎が、親の仇を討つために大きな矢じりを砥石で研いていると大薩摩文大夫が年始の挨拶に来て扇子と宝船の絵を置いていく。めでたい初夢でも見ようと思つた宝船の絵を枕に居眠りをすると夢に兄十郎が現れ、「祐経に捕らえられた、助けに来てくれ」と呼びかける。びつくりして目覚めた五郎。ちょうど大根を売りに来ていた馬子の馬を無理矢理奪い大根を鞭にして馬を急がせ、兄のもとへ向かつてゆく。	戦国時代、織田信長と今川義元との、尾張国知多郡の桶狭間における戦い。駿河、遠江、三河3国を領有した今川義元は、永禄3(1560)年5月、4万と称する兵を率いて上洛を企て尾張へと進軍した。尾張国清洲城主織田信長は、砦を構えてこれに對したが、前衛の丸根、鷲津などの砦は同19日までに陥落した。同18日夜半、清洲を出発した信長は、19日正午頃、沓掛から進んで大高に到着した。三面起伏の迫る低地(↓田楽狭間)に休憩していた義元の本陣を、約3000人の兵をもつて風雨のなかを急襲し、その首級をあげた。信長の天下統一に向けた第一歩となつた戦い。	羅生門に鬼が出るという噂を聞いた源頼光四天王の一人、渡辺綱は真相を確かめるために、鎧兜と先祖伝来の髭切りの太刀で武装して一人で羅生門へ向かった。急に激しい風に見舞われ、背後から現れた鬼に兜をつかまれた。すかさず綱が太刀で切りつけた。綱は戦いの末に鬼の片腕を切り落とした。そして鬼は空へ覆う黒雲の彼方へ消えて行った。	平成大役者 十八代目中村勘三郎の当たり役として演じられ、平成中村座の「けら落どしから数多く演じられ、演出も毎回変化をした歌舞伎の名作である。 京の公家 吉田家が紛失した家宝「鯉魚の一軸(鯉の掛軸)」を巡り、豪放磊落な坊主 法界坊が繰り広げる笑い話、ふりっ子モラヌな物語。大喜利(最後の幕)では、法界坊と物語の中で法界坊騙されなくなった野分姫の霊が合体し現れる。(双面)しかし、忠義を貫くヒーロー忠臣勘平がお宝であった「鯉魚の一軸」を持って花道から登場し悪霊をねじ伏せ、消滅させる。 歌舞伎の「荒事」を演出に取り入れ「鯉魚の一軸」ではなく、大鯉を持って登場するのが歌舞伎の面白さである。	歌舞伎十八番の内の一つ。十一代目市川海老蔵が復活させた演目。高野山奥の院にある靈木の蛇柳を弘法大師が法力により、災いをもたらず大蛇を柳に変えたと言われている。この蛇柳のもとに物の怪が現れ、弘法の助けをなすことから、住僧定賢が退治するために現れる。住僧定賢は、丹波の助太郎と出会うが、助太郎は亡くなった妻への思いに狂い乱れ、ついには蛇柳の精魂と変えていく。蛇柳の精魂を住僧定賢が治めようとするが敵わない、そこに金剛丸照忠が登場し、蛇柳の精魂に立ち向かい、おさえて舞台へと押し戻す。	天下をもくろむ松永大膳が足利家に謀反を起こし、將軍義輝の母(慶寿院)を人質にして金閣寺に立てこもる。小田春永は慶寿院を助け出し、松永大膳の謀反をおさめる為、家臣真柴久吉と佐藤虎之助正清を金閣寺に送り込む。 姿を変えて金閣寺に入り込んだ二人は無事に慶寿院を助け出し、松永大膳を追い詰める。 怒りくる大膳に戦場であらためて会うと約束する。	鎌倉時代の曾我兄弟による敵討ちに取材した作品で、通称『曾我の対面』、または単に『対面』とよばれています。父を工藤祐経に討たれた曾我十郎・五郎の兄弟は、正月に工藤の館を訪ねます。兄弟は、小林朝比奈の計らいによって、敵の工藤と対面します。盃を受けた五郎は、「親の敵」と工藤に詰め寄りますが、兄の十郎は「粗相のないように」となします。工藤は富士の裾野で行われる狩りの総奉行職を勤めた後で、兄弟に討たれることを約束し、年玉代わりに狩場の切手「通行手形」を渡します。	永祿八年、毛利氏は尼子氏の居城である月山富田城を攻撃。堅固な城と尼子軍の奮戦により戦いが長引く中、毛利軍の品川将員は武勇にすぐれた尼子軍の将、山中鹿介を一騎打ちにより討ち取ることを決心。同年九月、将員は幸盛に勝つため、自らの名を「榎木狼介勝盛」たらさおのかみのすけかつもり」と改めると、鹿介に一騎打ちを申し込む。鹿介もこれを承諾し、城下にある富田川の中州にて一騎打ちを行うと、鹿介が勝利した。	市川家が成田山新勝寺の不動尊を厚く信仰しており、成田屋という屋号もそこから出ております。 「成田山分身不動」という演目の大詰めで自身が信仰する不動尊に扮するというのが呼び物の特徴な芸です。 現在は「雷神不動北山桜」の中で「鳴神」「毛抜」とともに大詰めで「不動」を見せております。	絵本太功記は江戸時代に創作された絵本である。当時は武将名を書くことを遠慮して偽名で書いた絵本が庶民に読まれ、この武将は誰々と想像しながら楽しんでた。内容は、主君 小田春永(織田信長)から強いられた武將の武智十兵衛光秀(明智光秀)は天下万民のためと謀反を起こし、寢所の本能寺を攻め信長を討つた。この謀反を人の道に外れていると、光秀の母は恥じて尼ヶ崎に閑居する。この尼ヶ崎で光秀と真柴筑前守久吉(羽柴秀吉)が会い、山崎の地で戦う事を約束して別れる。	関所を通ることはできるか、できないか。逃げる者と調べる者の緊張感にあふれた攻防。主君が生きのびさせる為、家来が選んだ道は…。 源義経は家来武蔵坊弁慶らと逃避行を続ける。北陸道安宅の関で彼らを守っていたのは、関守富樫左衛門。身を隠しきれない義経。主君を助けようと必死の弁慶、その強い思いにふれる富樫のぶつかり合う三人の立場と心。終始気の抜けない名場面が続く。	伏見稲荷の朱の大鳥居前にいる源義経らは、供を願う愛妻静御前に形見として初音の鼓を託し、静を残して都を去ろうとしていた。別れに涙する静は追手に捕まるがそこに現れた義経の家来、佐藤忠信に助けられた義経は忠信に自分の鎧と源九郎義経の名を与えて静を守り都に留まることを命じた後、武蔵坊弁慶らと共に西国に向け出発した。実はこの忠信は初音を鼓の皮に使われた父狐と母狐を慕い忠信に化けた白狐であった。	平将門は関東一円を手中に収めて「新皇」を自称するようになった。それに対し、依藤太秀郷は将門追討の兵を挙げ、天慶3年、将門の本拠石井に攻め寄せた。将門軍は風を負って矢戦を優位に展開したが、将門が勝ち誇って自陣に引き上げる最中、急に風向きが変わり勢いを得た秀郷軍は反撃に転じた。将門は自ら先頭に立ち奮戦するが、飛んできた矢が将門の額に命中し、あつけなく討ち取られた。秀郷はわずか2週間の戦いで乱を鎮めたのであつた。	時は源平合戦の時代。靈験あらたかな摂州摩耶山へ、平家の人々が戦勝祈願と帝の病氣平癒の祈念のために、一門の重宝を持参してやつて来る。ところが源氏の侍がこれ盗み取るうとして、宝は谷底へ落ちてしまう。その谷底では、順礼の七兵衛と虚無僧の次郎蔵は身の上話を語りあっているが、実は七兵衛こそ平家の勇將悪七兵衛景清で、次郎蔵は源氏のなかでもそれと知られた武將三保谷四郎国俊であった。そして正体を明かした二人は、一騎打ちを始め、その力を競いあう。	平将門は関東一円を手中に収めて「新皇」を自称するようになった。それに対し、依藤太秀郷は将門追討の兵を挙げ、天慶3年、将門の本拠石井に攻め寄せた。将門軍は風を負って矢戦を優位に展開したが、将門が勝ち誇って自陣に引き上げる最中、急に風向きが変わり勢いを得た秀郷軍は反撃に転じた。将門は自ら先頭に立ち奮戦するが、飛んできた矢が将門の額に命中し、あつけなく討ち取られた。秀郷はわずか2週間の戦いで乱を鎮めたのであつた。	伊藤大 戸澤至 黒澤賢太郎									
山本良平	鈴木勝徹	高橋秀行	工藤	鈴木和成	鈴木和成	佐藤	村岡耕平	小松真徳	青柳博昭	高橋優徳	木元博幸	島山忍	島山学	島山勉	佐藤	村岡	高野	渡部	辻	高橋	伊藤	戸澤	黒澤賢太郎	山本良平